

1900-1920 年代の東京における文学者とカフェ

五木田 星南

明治～昭和期の作家たちにとって、カフェはただの飲食や仕事ではなく、同じ時を生きる作家同士を結び付ける交流の場でもあった。しかし、明治～昭和期のカフェと作家にまつわる研究では、いずれも交流の場としてのカフェが当時の作家たちの文学や思想にどのような影響をもたらしたのか検討されていない。本発表では、その検討の足掛かりとして、文学者が震災前後の 1900-1920 年代にカフェをどのように描いたかという視点から、文学者にとってカフェはどのような場であったのかを考察する。

広津和郎は、「吉井勇及びスバル派の当時の新興芸術派達」、谷崎潤一郎、長田秀雄などを「文壇カフエ党の第一期生」とし、広津自身らを「第二期生」とした(「カフエ漫談」(1930))。本発表では広津の区分を参考に、二つの世代にとってのカフェの共通点・相違点を、第一世代は主に木下杢太郎(『スバル』派に属する)、第二世代は主に広津和郎の随筆から分析する。

本発表では、第一に、木下杢太郎の随筆から、芸術家のサロンとしてのカフェの姿を見ていく。「パンの会」の思想やその背景を踏まえ、西欧の象徴、ないしは日本の芸術家が“芸術家”(西欧の芸術家を手本とする)としてのアイデンティティ創出のための装置としてカフェを捉えようとしていたことを示す。

第二に、「パンの会」とは対照的に、西欧模倣という日本の特徴を象徴するものとしてカフェを挙げている広津和郎の随筆から、1910 年代後半～1920 年代のカフェが芸術家のサロンとしてではなく、気楽に入れて珈琲を飲む場所として機能していたことを論じる。

最後に、木下杢太郎(「第一期生」)にとっても、広津和郎にとっても、カフェは他者と繋がる場であったことと、それに付随する共通点や相違点を改めて検討する。それによって、1900-1920 年代の文学者たちにとってカフェがどのような場であったのかを総体的に考察し、結びとする。